

小川政弘作

## 「いじめ 後編 心の垣根－恵子の場合」

- (効果音) (始業チャイム)
- 早船先生 じゃ出席を取るぞ。はっきり返事せい。代返はいかん。お前らの声はみんな分かつとる。いいな？
- 吉田(以下、生徒それぞれ返事)、加藤、松浦、藤原、品川、松崎、山本、山本恵子！ また休みか。それじゃ松村もいないだろ。松村かなめ！ またあいつら2人、フケやがった。来週から中間テストだってのに、どんなつもりなんだ、全く！ よし、みんな教科書の52ページを開け！
- (効果音) (教室のガヤ)
- ナレーション ここは青春中学2年B組。声の主は、数学で担任の早船先生。受験体制一本やりで、ついていけない生徒は容赦なく痛めつけるので、生徒の嫌われ者でした。そのやり玉に上がっていた山本恵子と松村かなめは、突っ張りグループ「黒ユリ」のメンバーで、そのツツパリぶりは、3年生の<sup>ア</sup>タマにも一目置かれるほどでした。
- 当の2人は、そのころ…。
- (音楽) (喫茶店のBGM)
- 山本恵子 あーあ、また早船のやつ、あたいらのこと毒づいてんだらうな。
- 松村かなめ 構うことないよ、あんなやつ。どうせあたいらのことなんか、眼中にないんだ。あいつの頭ん中は、一人でも多く受け持ちの子を高校に入れることだけ。“ついてこれないやつは勝手にしろ”だもん。
- 恵子 顔見たくもないよ、あんなやつ。タイマンじゃかなわないから、こっちはにらみつけてやんだけど、「なんだ、その目は！」つって、また一発だよ。だけど負けないよ。あんなやつ、絶対負けないからね。
- かなめ そうだよ。あんなやつ、先生じゃないよ。クラスのみんなだって、あいつのこと絶対心の中じゃよく思っていないんだ。だけど、言うこと聞かないとすぐ親にチクリやがって、内申書チラつかせて脅しやがんだ。きたねえんだよ、やり方が。恵子のツツパリも相当のもんだけど、でもあんだって、初めからそんなんじゃないんだろ？
- 恵子 そりゃそうだよ。先公とケンカしに中学来たわけじゃないもん。あん時だよー。
- (音楽) (ブリッジ)
- 先輩 あ、恵子。
- 恵子 あ、先輩。なんですか？
- 先輩 今日さ、石田先輩知ってるでしょ？ うちから高嶺高校に行った。

恵子 え？ ええ。新入部員歓迎会の時に一度来てくれた…。

先輩 そう。我らのアイドル、石田啓介先輩。彼がさ、都大会も近いことだしって、今日コーチに来てくれるんだって。だからさ、5時限の早船の時間にさ、ちょっとフケてお菓子やジュース買ってきてよ。

恵子 え、あの…、放課後じゃマズいんですか？

先輩 何言ってるの。石田さん、忙しいから学校終わるころ来て、すぐ練習始めるんだって。そんな時間ないよ。それに、早船の授業なんか出ることないよ。あんた、頭いいらしいから、あとでやるときゃ平気よ。

(効果音) (始業チャイム)

先輩 (去りながら)じゃ頼んだわよ！

ナレーション 恵子は、仕方なく、授業をサボって買い出しに行ったのですが、少しの間でも出ようとクラスに戻ると――。

(効果音) (教室のドアの開く音)

早船先生 山本！ どこへ行ってた?!

恵子 は、はい。あの、ちょっと…。

早船先生 “ちょっと”なんだ？ 大事な授業を抜け出して、しかもわたしに前もって断らずにいなくなったんだ。よっぽど急で大事な用があったんだろう。言ってみろ。

恵子 あ、あの、バスケット部の先輩に言われて、部活のあとのお菓子を買いに…。

早船先生 何ィ?! お菓子だと？ わたしの授業をサボって、お菓子を買に行ったのか！ 大した度胸だ。山本、あとで職員室に來い！

ナレーション 早船先生は、“校則を犯した”として、恵子を厳しくしかり、バスケット部からの即刻退部を命じました。彼女が、「好きなバスケをやめることだけは」と涙を流して頼んでも無駄でした。

恵子 (モノローグ)(泣き声で)わたしは言われてやっただけなのに。それじゃ頼んだ先輩はどうなの？ なんでわたしだけが?! (しゃくり上げる)どうして?(エコー)(間)

早船、どうせそう思われてんなら、いいよ、ワルになってやるよ。その代わりに、先生のこと、赦さないからね。絶対赦さないからね！

(音楽) (ブリッジ)(回想終わり)

かなめ …ふーん。そういうわけ。悔しかったろうね。そこへ行くと、木村先生はいいよね。それに、恵子には石田さんもいるし。

恵子 うん。先輩、今日もあたいのバスケ、コーチしてくれるんだ。あたいさあ、先輩と一緒にいるときだけは、素直に自分のまんまでいられるんだよね。

ナレーション 石田先輩は、あの事件があってから、責任の一端を感じて、また恵子のバスケットの素質を見込んで、時々自分の高校に呼んでは、練習を見てくれていたのです。それだけではなく、傷ついてツツパリ出した彼女のために、いつも祈

っていたのです。彼は、木村先生に導かれて、高1の時、クリスチャンになっていました。その日の練習が終わっての帰り道、公園のベンチで――。

恵子 先輩、ありがとうございました。ボールを追って汗かくと、体の中のモヤモヤが吹っ飛んじゃいます。ああ、一度でいいからクラブのみんなと試合に出たいなあ。

石田 うん。恵子ちゃん、スジがいいからな。じゃあ一丁僕が、恵子ちゃんのクラブ復帰のために頑張ってみっかな。

恵子 え、先輩が?! でも、どうやって? だって、あの早船のやつが…。

石田 うん。木村先生に頼んでさ、できるかどうか分かんないけど、やるだけやってみる。でもその前に、君にもやってほしいことがあるんだ。

恵子 やります。バスケに戻れるんなら、あたいたい…、じゃない、わたし、なんでも!

石田 恵子ちゃん、この間、木村先生のファンクラブのことで、内田君をいじめたら、トイレ呼んで。

恵子 あっ、なんで知ってんの、先輩?

石田 木村先生から聞いた。先生、君のこと、一生懸命祈ってたぞ。

恵子 いの、って、た?

石田 ああ。僕もさあ、中2のころは番張って早船先生にもずいぶんいらまれたけど、立ち直れたのは木村先生のお陰なんだ。その木村先生がさ、ある時、こう言ったんだ――。

木村先生 (エコー)石田、お前が番張りたい理由はそれなりに分かる。そのツツパリのむなしさが、自分で本当に分かるまで、やりたいならやれ。だがな、一般の生徒は絶対にいじめるな。彼らは仲間なんだ。仲間を敵に回したら、お前が番張ってる意味はなくなるんだぞ。

石田 先生は、僕の心の中までみんな知ってたんだ。僕が本当に立ち直るまで、それからしばらくかかったけど、でも弱い者いじめはその時以来キツパリやめたんだ。恵子ちゃん、君はどう思っただの、今度のこと?

恵子 うん。あん時、木村先生にもどなられたし、千鶴子に悪いことしたと思って、ずーっと、心の中で、あたし…(涙ぐむ)

石田 よし。じゃ内田君に謝るんだ。素直に、心を開いて。できるね?

ナレーション 恵子はうなずきました。ところが、この2人の語らいを、偶然通りかかった早船先生が見ていたのです。

次の日、ホームルームの時間――。

早船先生 さあて、今日のホームルームは“男女交際”について話し合ってみるか。お前らは、“不純異性交際”って言葉を知ってるか? 例えば、大事な授業をサボって他校の男子とツルんで遊び回り、挙げ句は肉体関係まで持つってやつだ。山本、お前、昨日の午後はどうした?

恵子 (モノローグ) あっ、あいつ、きたねえ。  
るっせいな。お前に関係ねえだろ。

早船先生 大ありだ。わたしはお前の担任だからな。山本、一緒にいたあの学生はどこのだれだ？ お前たちは、どの辺までデキてるんだ？

かなめ 先生、そんなんじゃないよ、恵子たち。あの人は先生も知ってるOBの石田さんだよ。

早船先生 石田？ ああ、あいつか。だが気をつけたほうがいいぞ、山本。お前らもだ。気を許した仲ってのが、一番危ないんだ。山本のおふくろさんは、スナック勤めだから、その方面はよく知ってるだろうし…。

恵子 てめえ！（立ち上がる）

内田千鶴子 先生、そんな言い方、やめて！

恵子 (モノローグ) 千鶴子…。

早船先生 なんだ、内田。お前、山本の肩を持つのか？この間、こいつにやられたんだろう、こっぴどく？

千鶴子 そんなの関係ありません！ 先生はどうして恵子をそんなにいじめるんですか？ お母さんのお仕事まで持ち出すなんて、卑劣です。

大場直美 それに先生、ほんともっとひどいことしてる子、何人もいるのに、先生は自分のお気に入りだと見て見ないフリ。えこひいきはやめてください！

早船先生 (慌ててしどろもどろに) お前ら、なんだ急に？ まま、落ち着け。

男子 先生、外見だけでおれたち判断するのやめてくれよな。やれチヨウランはダメだ、スカートの長いのはやめろ、そんなことばっかし上から押し付けて、どうしておれたちの心の中のこと、聞いてくれないんだよ。分かろうとしないんだよ！

女子 恵子たちのツッパリを目の敵にしながら、どうして先生は、恵子がなぜそうなったか、考えようとしませんか？!

(効果音) (生徒たちの追及の声、口々に)

ナレーション 2年B組の積もり積もった内からの声が、一挙に爆発したのです。実は、あの事件のあと、木村先生の話に心を動かされた千鶴子が、次のホームルームでみんなで話そうと、ひそかにクラスの一人一人を説得していたのです。  
その日の放課後――。

恵子 あ、千鶴子。今日はありがとう。わたし…。

千鶴子 あ、そのことなら言いよ。これはみんなの問題だと思っただけ。あたしまだ、あなたのこと赦せるかどうか、自信ない。でも「心の垣根」は、まず自分が開くもんだ」って木村先生に言われたから、とにかくあたしは、あなたに開いたわよ。恵子、今度はあなたの番よ。これから部活あるから、また。じゃあね。(去る)

恵子 千鶴子…。

ナレーション 恵子は、今、何かに向かって心から「ありがとう！」と叫びたい気持ちでいっぱい

いでした——。

<完>